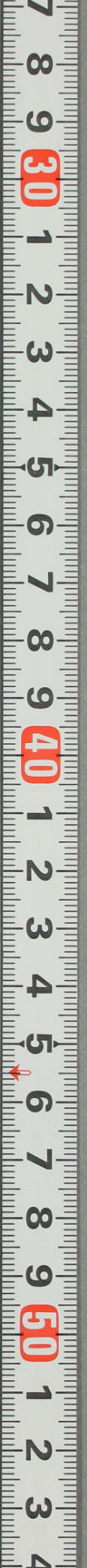




好古新集 上

現
千四百十号二海

特別
A4
1387



門 八 4
卷 1887

放生新語集序

敬て尋はよめ集の慈悲廣大なり
その深きをいふと人かすするん物
乃比をみるや一淺きハありんぞや是
行住坐臥のうららたき淺きより行住
小入婦もこころある淺きも根源
を推しつるはるる場は佛に戒殺盜
淫妄酒の最初をあける殺生こそ風

放生二

えんつゝ乞を重罪とす内ハ人々本具
 の仏性を殺外ハ物此命を殺害す
 嗟呼世の中濁りて世也己う身をも愛
 て他乃肉を食せんう為よ山ふ登る
 弓矢を張或ハ鉄鉏此玉を飛しむ
 射し出てをもと持海入てハ網釣を
 投海劇よとて移成つるハ刃刀を以て
 肉とさき湯火成以てこれをも真眼す

地獄の業因未未恐へハ只嘗て浮世
 乃人殺けむとやめて好む好むより
 志やうれ家よる災難来るハ此等非常
 守護しやめと仏經ハ審るるハ愛
 予洛系の表は一人此法友と昔
 目乃るもの終つてる近き代の人
 出して希瑞あるける頼これ見聞し
 を書記勢もちう紙つものりて冊

成俵 なりた 好 よし 新話集 しんわしゅう と名付 なづけ る者 もの 也 なり

方 かた 豆 まめ

放生新話集上之目錄

白鷹 しろたけ を助 たす 事 こと

兔 うさぎ を助 たす 難 がた をのう のう 事 こと

蛇 へび 人の命 いのち ふら ふら 事 こと

狐 きつね の報恩 ほうおん よより よより 富貴 ふき とある ある 事 こと

法師 ほうし 怨 うらみ 乃 なり 事 こと

雞 とり 代 しろ 事 こと

猴 さる 法 ほう 事 こと



放生 ほうじやう

三

赤良の事

鮑を助舟の難を乃つる事

狗の川を後守事

鳥少力を持来事

燕蟻此事

川太郎乃事

猫と雞の事

雜喉を殺して徳益を得事

上白鷹をたすける事

實文六年九月中旬のふとあるに武州戸

乃ゆりし町を産れ他多束或束のゆめは女人

徳片多あり一人来てあつよひさ海つる洞

をありし戸けりハそもく我ら此らおる

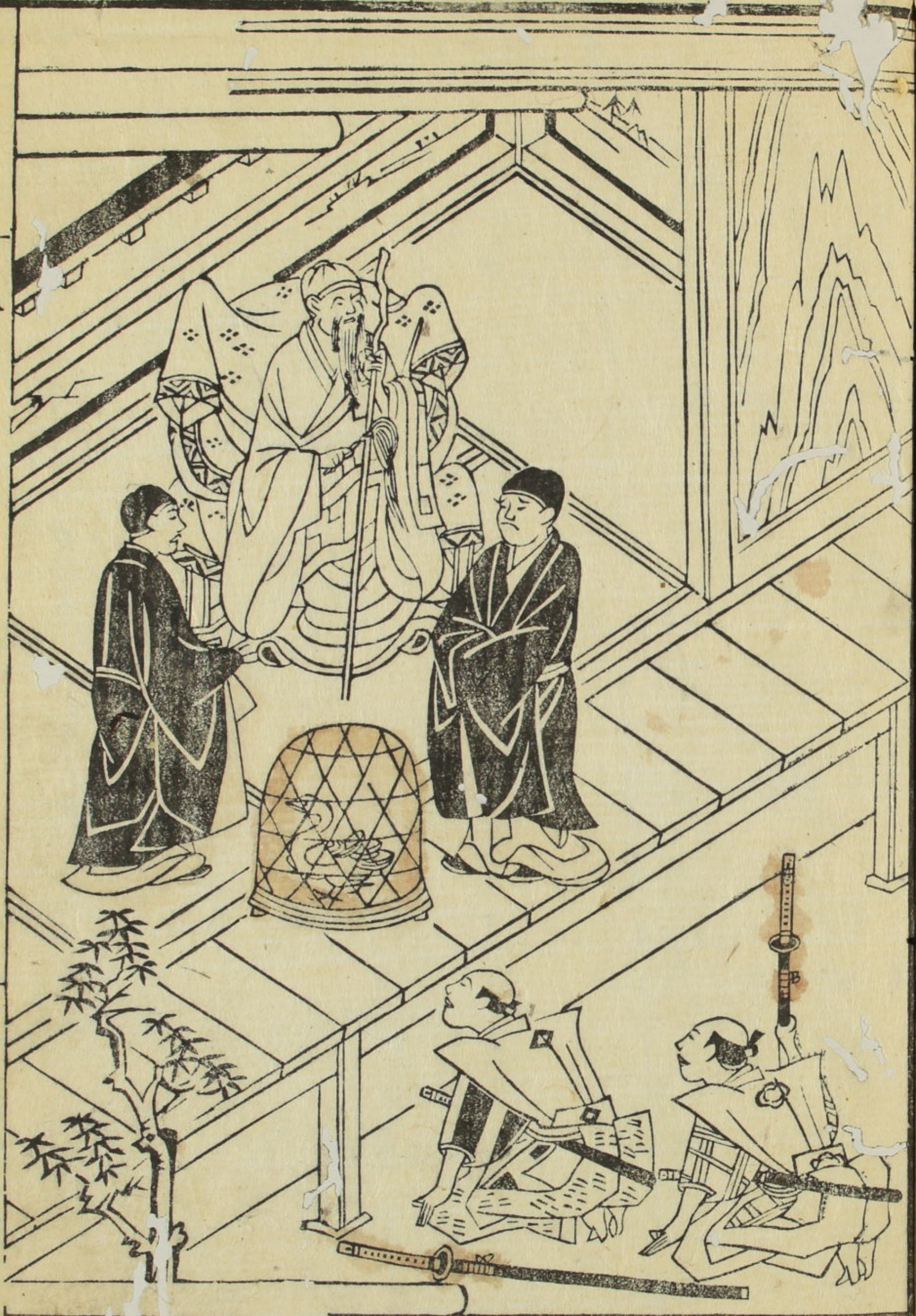
塞乃白鷹あり明後日我を殺して合せん

為よ人来て笑りしむへしむしむし

やあるはたすけあれと世に何れあること

孫を初 昂成まれ角の勢又あること

さうめふらり 撃らむ女房とてうつてゆめを
 浮世のあこことありし 打ちてあきけるその
 夜乃夢よまき 伴の長をそそみる夜
 てうれをくよりうかの身申よみし
 夢をたぬるよ白屋をその座ふま合人
 遠大隅守屋家来の侍をふしけ物鏡を
 かのあつさまを見えて 嗟呼仏法流布の世也
 幸必僻地乃回生まてもなまけをさとし
 慈悲をむしとすけ界よけれまて物のあえ
 夢をさしむるハ畜生よたもあとしく
 助すん



かき

一

ともくくこれお好く〜とらふあよ人の白濁
 一ヶを費し〜ま〜りたはあるに餘る
 則このもふおあ人みふ希是れ思
 を血〜す〜かの侍はあ〜おを八百
 屋仁き忠少りありのことせとて云いふ
 彦傷れ弾所関東下向乃より〜暫
 この能はあ〜と〜と〜結綴はあはる
 へんれあ〜もの人〜
 好むは〜ハ〜みる信心を交結してそれ
 好むをす〜の〜
 もるれ高賣とやあ〜は〜世とあ〜
 けり

二つ巻を助難をのめあ事

明曆乃末つ〜伊勢のあ〜ことらあは商人
 坂倉はあ〜とらあ〜に接津のあ〜
 けり〜大ある巻のそれ甲三入よあまれ
 るもあ〜けるる〜は〜もあ〜
 あり〜あ〜た〜のあ〜ぬ

とうりありしに名乗つて驚きふりまゝのこゝろにて
 くあつたをわづらひてけりそれいふ
 いふもの志あるにあらざるもいふ命を
 おもひし人あふくもくも甲の上よ
 難名をかきしるゝあめその浦よをありめ
 けりけりけりけりけりけりけりけりけり
 海底よ入けるされえその後には名乗つて高貴の
 為よし手へおもむくもて大坂より船より大
 まりしをゆく船路にて難風よあり難船
 破損そのかすも志し人のこゝろにありあり

死しハキミこの心あるあひたりなり今
 半死もくもやうしてその夜はあつても待
 けりこころに風もあつて波はあつて
 よいともなれぬ人々みよゆめれえむ
 心持して志けりあつてけりけりけり
 ありしに大あつてあつて下よりかみお
 くのものを船中の人もあつてあつて
 へゆくもなれえすもあつてあつて
 船路よありありありありありありあり
 うゆりよあつてあつてあつてあつてあつて

答奉^子行^子

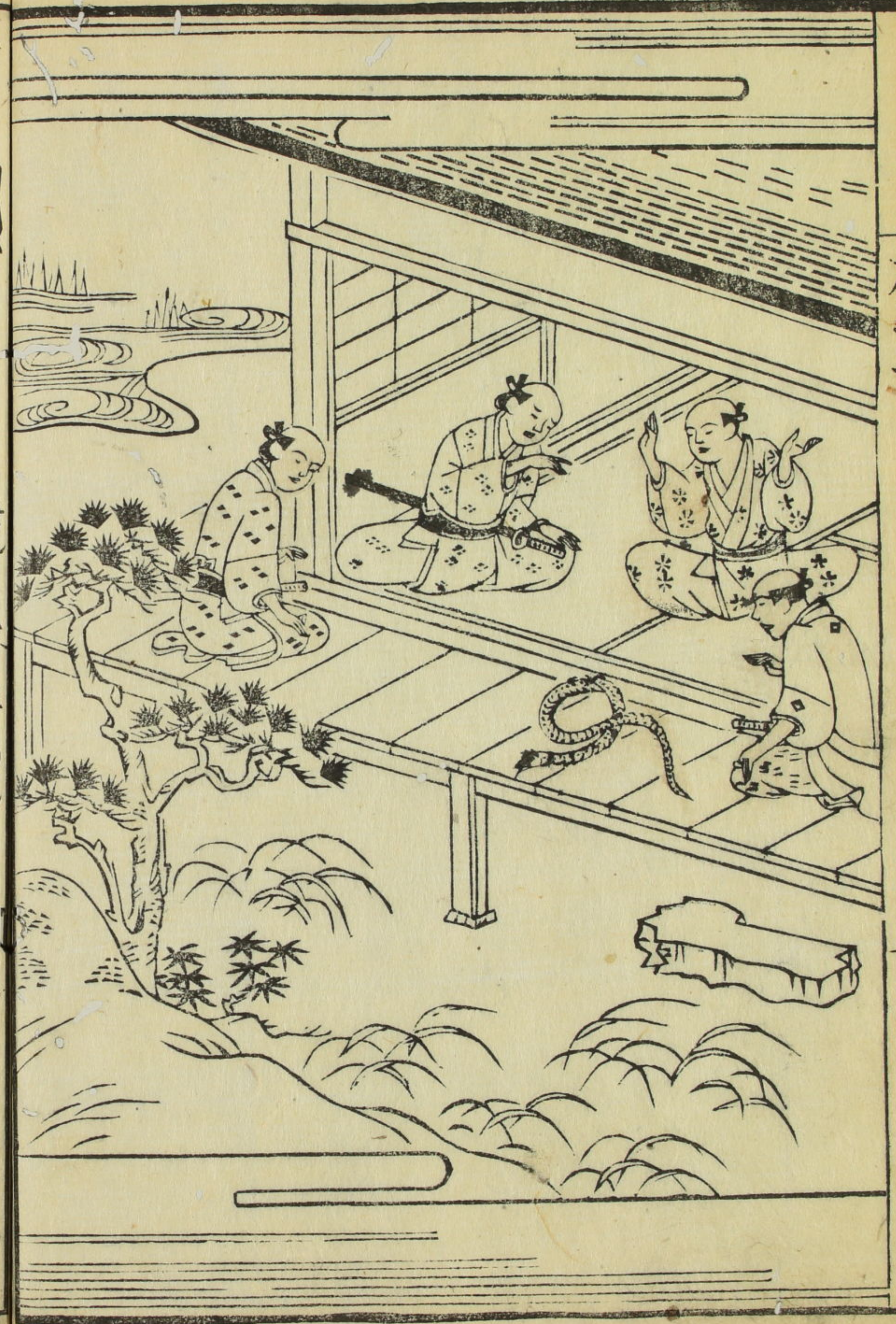
蛇人の命^{いのち}おろす事

武州^{ぶしゅう}江戸^{えど}にて或侍^{あるさむらい}の屋^やありしを^を過^すりし
時五寸^{ごすん}よりたゞしむる小蛇^{こへび}を^を毒^{どく}まじりしありし
可^べら居^ゐてこゝろさんと志^{こころ}げらるるやこゝろ居^ゐてし
常^{とこ}つてそのまじり居^ゐるふ^ふお^おあ^あを^をし^しま^まし^しの^のや^やこゝろ
されあんとあ^あの^の宿^{しゆく}お^およ^よ持^{もち}か^かり^りて^てお^およ^よ入^い
念^{ねん}を^をあ^あへ^へ目^めか^かを^をあ^あり^りて^てお^およ^よお^おひ^ひる^るは^はと
一^{ひと}二^{ふた}年^{ねん}の^のま^まを^をと^とる^るこゝろ^{こゝろ}に^に蛇^{へび}二^{ふた}人^{にん}を^をり
しあ^あの^のひ^ひぬ^ぬつ^つひ^ひは^は孫^{まご}や^や物^{もの}の^のこ^ころ^ころ^ろに^にあ^あり

お^おれ^れて^てま^まあ^あり^りの^のひ^ひぬ^ぬつ^つひ^ひは^は孫^{まご}や^や物^{もの}の^のこ^ころ^ころ^ろに^にあ^あり
る^る或^{ある}時^{とき}晝^{ひる}乃^{すなは}ち^ちぬ^ぬる^るよ^よこ^ころ^ころ^ろに^に孫^{まご}して^て目^め覚^さ
あ^あら^らゆる^ると^とて^て足^{あし}を^をの^のち^ちに^にせ^せら^らる^るあ^あら^らる^るは^はあ^あり
目^めを^をお^おひ^ひつ^つひ^ひを^をま^まと^とあ^あむ^むら^らつ^つつ^つは^はや^やあ^あり
て^てあ^あん^んお^おへ^へり^りあ^あら^らま^まを^をま^ます^す毒^{どく}む^むし^しの^のこ^ころ^ころ^ろに^に
あ^あれ^れし^しその^のい^いふ^ふみ^みつ^つの^のこ^ころ^ころ^ろに^にせ^せん^んは^はあ^あり
お^おひ^ひり^りと^とう^うあ^あや^やむ^むら^らに^にか^かの^のつ^つひ^ひを^をの^の
ま^まあ^あむ^むし^しの^のい^いふ^ふと^と入^いや^やり^りて^てく^くさ^さつ^つの^のこ^ころ^ころ^ろに^に
ま^まあ^あら^らる^るか^かの^のま^まを^をま^まよ^よつ^つひ^ひぬ^ぬれ^れを^を昂^{たか}り^りし^し
よ^よい^いふ^ふま^まの^のこ^ころ^ころ^ろに^にあ^あら^らる^るこ^ころ^ころ^ろに^にあ^あら^らる^る

伊豆守殿は先代志願のよしありて
 吉田伊豆守殿は家来のよしありて
 のありしよしをいふていふていふて

三 狐の報恩はよく富貴にある事
 伊豆の州津とらふは本城屋のありて
 ういしあることごとく人ありそとこのうとく
 乃中集をたつぬるに後ハ昔も年申はる
 うもよちういあつては童子は人ありて
 狐子をとく 鞭杖をくはうちけるほとく



すてよこころをいへすもを本鏡屋乃ある
 凡つげ鏡せよをあへんしてきてきすけりそれ
 後のち或日乃ともあるいあへりれ女人よものつひお
 入すものよこ来てて毒どくまのつてをすすめてして
 ろしをかり自られいよんしていりける
 うけ女人よかりされと世の中よハあへりあさる
 こそあれちの林ま中ハ狐きつねの子あやまこころ
 ころよいりいりし乃されとも覆かへきりりゆ
 てい後うあまやして云いすてきあゆめ亭てい
 至も女を房うとありとりのあやしいもいも思おも
 つこのいりいりしをいりあひてみあは
 なりぞらされてありいりまこその申よ金かね
 子すあありきそいりいりありいり
 ゆいてみるよをいりてありりあ不し書ん
 といりしていりいりいりいり女人のいりり
 ありあへりいりいりいりあへりいりいり
 さてそのよういりいりいりいり今白しろれ
 ろいりいりいりいりいりいりいりいり
 ありいりいりいりいりいりいりいりいり
 いりいりいりいりいりいりいりいりいり

放生山

うらたに近きよきれあふ富貴の世とある
 世のくういふてもありてしあるす〇法くど法
 ころまら山とてしん伊勢の本鏡屋ハ世をて
 らんと今よ郵もまてその家つころあく傳り
 けり

法師熊の事

實承のころ武州の傳る所まで傳入
 車加一多の鞋鏡をまてくもく學問れあり
 眞羽へくころよきしぬ山申ありてお
 をりけりころまのいあよあはらるるをるる村

きりすけてとてあはらるるその日れはあり
 うしつたひこれころいすくそありてなと
 可新とらりよあ人あまう乃ひけ勇ありつる
 のしつたひこれころいすくそありてなと
 らしつたひこれころいすくそありてなと
 りあはらるるに汝我もこれ山賊あり多の鞋鏡
 をあすへりりりりりりりりりりりりりりりり
 らしつたひこれころいすくそありてなと
 らしつたひこれころいすくそありてなと
 らしつたひこれころいすくそありてなと
 らしつたひこれころいすくそありてなと

の谷よつとあつとす志をましつりとてあつと
 もり見すあゆりるうこつとあつとあつとあつと
 川ありと見よまうせてかち見しつとてむり
 ひ乃ましよとつりあつとあつとあつとあつと
 じすまうす嗟呼南無三聖と弱んしつと機
 をまうつめてあつとあつとあつとあつとあつと
 何りやしつと見よまうつとあつとあつとあつと
 やすあゆりるあつとあつとあつとあつとあつと
 素いしつと矢を射つる川を流して穴
 をあつとあつとあつとあつとあつとあつと



法師さきりとの返り籠はさむ矢一すもまら
 らせんとあつ引てさしつるむらんやま
 劣法師をさつとあひひーあまれう入
 らま乃さるるをえんんーていあてあま
 所もいささしあいあさうまいーをるーやま
 にかをもとら入てあ劣をちて引さ
 らいてけりさまいさまれ報恩はあさ
 女鑑乃事

正徳五年の善津の雪組泉乃際ある徳
 所せりお知よあるの年来る名をさるあ
 けるうあ利して合せんうあよ殺さん
 ありよらうさあうれ浄土寺へあけ入ぬあ
 うけてゆけを信持お合包角らあてたす
 けそのましてさあつさ乃日徳夜かの屋
 名よの鳴をすするさあさくさひーち申
 してさあさいてさあまーれらあささるあ
 せんあゆんすうさそそそのう夜ハみる
 い弱目せしてすさくときさうー人
 来て付火をさして寺己よあけあんとす

ていふことあるはあはれをいふ人あんとせし
 を歸すようならむすはるるの報恩ありと
 くらみあうんけいされをなすは五とくを
 から冠をかきて官のつらさをあはれり
 身は母衣をかきて武者は似し足はけつああり
 よく不このらさをいれあす命をかきて友をよ
 は是仁の道にあはれやあつらうてくはあ
 をすむ故はそのつらさを下花をあはれ
 ことゆめくころすことあはれ

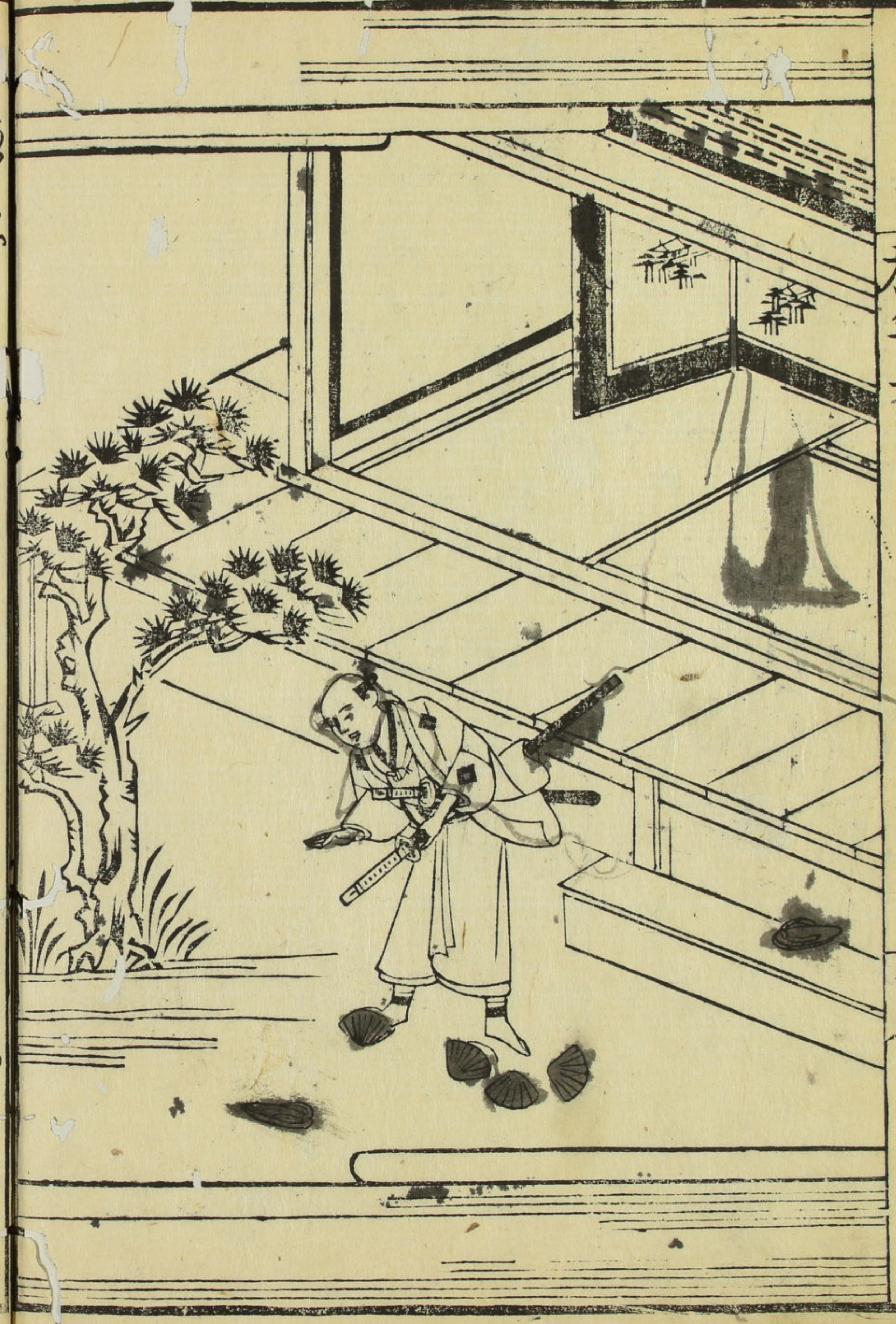
猿 徳山

申むしのともあはれ
 ちやそいへ
 孫ともいへし
 ありある人あり
 るとて下人ふ云付
 ようて山中あり
 めらうよらぬあ
 とくしてこい
 さるのあをい

まげひ多をあれを拜をみれを人よがもあ
 いふくはさしをいかにあといぢるあま
 をつてくはそあをれあひん乃らりありあ
 ら人の人あひのま我りあれら人命あむら
 みあてああ今まてん乃は身をむむいほり
 業味のなる此の命をもとる方の補はせん
 とはいふていぞ氷道あり至人下そむさう
 してそはあかへ路まをいあひもよあまいよ
 のむくことありその恐念止胡あ人うん
 とゆりなすげまをれを礼敬してまら
 かの由ありてく差呼るまよのありれむ
 ーや志のせんまをくあんとてのむく
 まりてそれまらもまよく行脚と志
 あつてをまててくくうりうくまらり
 るやんてからかあまよくのしあま
 中してまらまらまらまらまらまらまら
 答よ中よまらまらまらまらまらまら
 うあまのまらまらまらまらまらまら
 慈念をあらしてかあまらまらまらまら
 片山地よりくまらまらまらまらまら

赤貝の事

丹州宮津の侍花田源三郎と云ふ宰人西條年
 申のころより懐刀初めは朝日さしりその
 比或知音のものとよりこれ書よすられて大
 きあるあつかいを給りけりその
 ころあふ人々をやりりして是を合世と
 りおかの宰人の信ある人まで志乃日あり
 せめてたすげ志をくく是れ角はあくるそ
 あきこころりよそ所のむすしてけんくお
 来て人みるまふらお合あはにふすをかし
 むるの多く并は死する人もまけ宰人もお
 ゆんとしなふまうもまりのをたつひよい
 ちうけんくんのある貝足のゆひをまむ
 是をまらさんと志けり申は時刻うつて聞
 解のあんものをれりその夜夢みくさ
 もあんやうある女やうこまらるるのやう
 そくまてまらかみよならよりいんやく
 今日乃あやうき法命ハられくまらふりな
 ありまらまんれあかしのととてその



まのあまの身より入るるをいふてゆめをさるひり
穿人よりものあひのをさる一あふここととそれ
えたりふあからありこれく奇め乃らめ
—あ—

この鮎を助犯の難をみる事

るみ—義鷹のころよふ川をいふ商人少道
具屋のちるあつとりふの筑紫五橋平へへる
とていふ地を由土依のふは船のせし時海
士のあひのをさるるをいふてうらりて
是をさるあつあつを風よさるけりてこ

二日午をちくるよりのきくけん候は船そ
 こより水き入すらんきりあんとする船も
 加子ものへきりあるといふあまてさるきけり
 うきりあまき入やもぬ船人よりこひあをほ
 けりあひのそこをみきは本のや一宿あり
 是より入よこそとてよくみれをわをひれ
 うと下よりすつまい宿乃あひまあつてあつを
 とめころまこころん是船の利益ありや
 かくかのふちを拜ねればより一知より
 命のりの一はあまを合すかこしとたあ
 一推言をたてんけり

七、^ノ河川の川を渡す事

都のあは梅つともさるあまめてさる道人
 老は係とらふ人きりけりちりちりこり然
 種系結するもて山甲をゆくみちれり
 一家村のあり男一人お大をて本家の指
 へまをいけりちりちりさんとするおは係
 指りてたかこひあを合すれりあは
 指りてたかこひあを合すれりあは

そとにて帰依依的依法海依傍とまらけ
 してそのものをさしてしそをいけりかゝるはま
 川まこのほと二なる海のありらるるあれ
 をあるまあるとて海さくさかあるある
 する人もあいてせんともなすやす
 ありようしるよう物来り衣のすそをさく
 是引みきそしききほとたすけー大あり
 あやさくさあおの人もまらけりぬは
 志しゆくも川の申へおのれを
 ともは尾をさくさくしてそよはる道者



かのいぬをせしむらひて川のあしに
るんやうくさうじりてはまゝに
その中しあがりゆり

鳥小刀うすを持集もちる年とし

近ちかきころ下系しも松系まつ色いろは赤あかい
るげ人ひとつひよしの礎い礎いへ
かゝふあつみゆらゆて村むらに
て田た中ちゆうにさるゆり田た文ぶんの
まこしをさみそやうと
とすまはまの屋やゆらうらと
とすまはまの屋やゆらうらと

しりてしりてしりてしりてしりて
その日ひにみりてしりてしりて
あまのつひよしの礎い礎いへ
なをさしてあつみゆらゆて
をさしてあつみゆらゆて
うさしよやうとさるゆり
仕し合あひとつあやうらるあ
らうらうらうらうらうらう
菴あんのまはあはうらうら

めつゝこゝろしやうしやうしやうしやう

川太島の書うらたらし

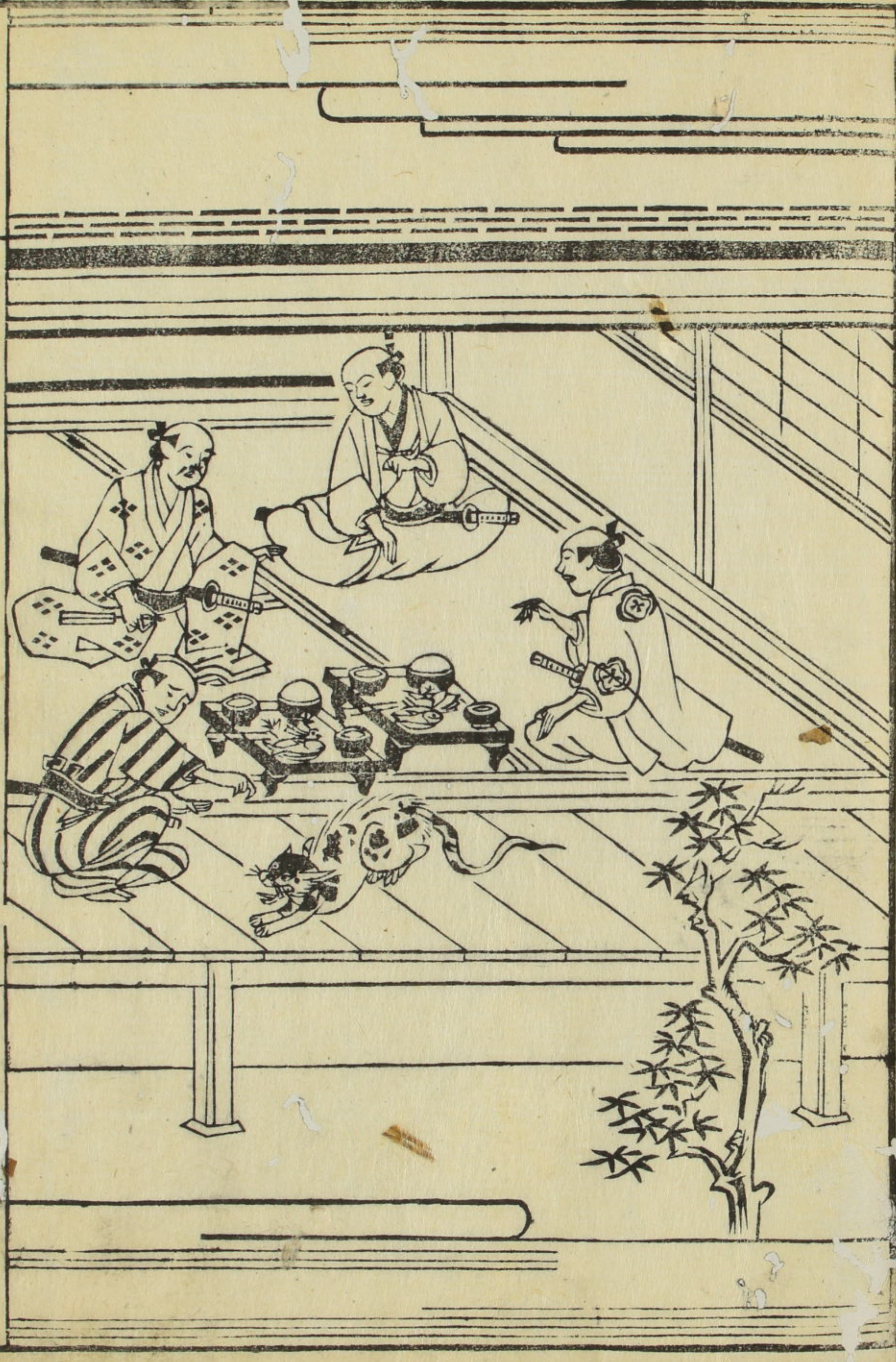
さうし喜のこゝろや 老後乃山家おのゑよすまはる
百妙ひやくまうのるすはあて 夢ゆめのをもむむあをさち
さつゝろろ地の中ぢのちゆうより川太島とらふん
げののののころころんは 細こて三歳さいとらうある
善子ぜんこれとくはあつてかのののの
りきよ引つあをさあはまもいさ申まうは引い
まんとせうけるあてあはうらんりふ
るのままはまてらうあるものやとあ

志むあふ人のあはれをうて
んさるかりのまては川太島とらあ物あり
人はあをまあすものそとらんを
せうハあからん—とてる屋やの権けんはさ
つせ一日二日をさげれを念ねん物ぶつのよは
見うくハ眼めをうせ家内けいだいよつて
り女にれよむらあは—はいのい
かる人はあをまをすものハく—
めしんりけれとてらうあをさち
うしをさあまいひ川太島ちうし

てあるをききりめいさうしんせまうり
 されハそら後下女のくーおよ金子を川の
 うきものにつつまて入あきひらしうれもあ
 さいりまはつらまこしんげ下女あやうつて
 ぬけうは毒水海へあゆとあう苦根とある
 いらんやまものんまて苦根のた猫とせ
 うんあをぬとらを果乃志るーあううせん
 や

ねこ ねこ と 鶏 とら 乃 事

長門の州山口に侍されー別してうき鳥



主君の御心多ういけるその申にこそ
 一はうらうらとある時よの御心多う
 ありて昔代のみ御心多う御心多う
 あり川はあふすしとていふていふ
 人をむげよとていふていふていふ
 そまに君の時をうたへ人もあはれ
 うあはれしもあはれしもあはれし
 あれとていふていふていふていふ
 罪をゆるせとていふていふていふ
 朋友の侍を御心多うあかの御心多う

あるもえんつゆりもえんとしていふ
 あよううらなその御心多う申にこそ
 くれあはれの名ありる人の御心多う
 なるる古縁にありる人の御心多う
 まへにうらなとていふていふていふ
 とうらなとていふていふていふ
 して主人よつれもあはれしもあはれ
 くれを御心多うす御心多うす御心多う
 てあはれとていふていふていふ
 けりあはれとていふていふていふ

乃もしもいひおぼしきことありては主人の御入り
 さまあつては方とて教諭をまゐりて御しりて
 笑ひのりやうりなをこゝらへておぼんおぼん
 よけのいさる宝物乃よを福に來て飛こえ
 うらすやとありいそのまゐるを餘よまの
 福よあつてお富せりのあまの備へるは是を
 もして念ひりしに即座に死する人にて
 おもろきもあ入りてははるををこゝらへ
 いあつてははるのとあふ人にてははる
 ちり

雜儀を記して徳益を述べ奉

近きころ伏見を後橋の邊にお徳六十餘
 の書かきしころ時より殺せしをこのとき
 よふこの愚あつて念ひりてある
 つれつれはふいふをすしりてははる
 りおそし二十歳よりあるうあやに引く
 つれつれ念仏ありてははるりあや
 乃殺せしをいかるみりてははるりあや
 うけは飛くまゐるをあつてははるり
 てつれその時よふりてははるりあ



Figure 1

Figure 1

Figure 1



